

東京と地方居住者の「東京イメージ」の比較的研究

1. はじめに
2. 方法
3. 結果
4. 考察
5. 結論

古 沢 照 幸*
加 藤 義 明*

要 約

石垣, 白河, 稚内, 東京の4地域の小学生, 中学生, 高校生, 大人(小, 中, 高の親)を対象とし, 56の東京へのイメージ項目, 東京への知識度, 東京の情報をどれだけ欲しいかという情報獲得度や性別, 年齢などの基本的属性について質問した。56の項目の因子分析(factor analysis)の結果, 東京砂漠, Enjoy東京, 先進都市, きたない, 便利, ビジネス都市の因子構造を確認した。確認された結果は次の通りである。地区別ではネガティブイメージ(東京砂漠, きたない)で地方サンプルが高く, ポジティブイメージ(Enjoy東京, 便利)で東京サンプルのイメージ得点が高かった。ポジティブイメージである先進都市ではこの通りではなかった。知識度については知識度低群でポジティブイメージが低く, ネガティブイメージが逆に高い。地区別の結果にこの知識度の影響も考えられる。地方サンプルでの東京へ“行ったことがない”, “行ったことがある”, “住んだことがある”という経験要因では経験あり群の方が各イメージ得点が高くなる傾向にあった(ネガティブ, ポジティブ共)。きたないイメージでは地方サンプルと東京サンプルとの得点差を開く要因となっている。また東京砂漠イメージでは“住んだことがある”より“行ったことがある”方が高い得点を示した。地方サンプルでは情報獲得の各イメージへの影響が知識度より大きかったが, 東京サンプルではこの傾向は見られなかった。発達的には地方サンプルで発達段階が上がるにつれほとんど(6イメージのうち5)のイメージ得点は高くなる傾向にあるが, 東京サンプルではこのような傾向は一部のイメージにあるだけであった。発達の影響が特に大きいのは東京砂漠イメージで対人関係に関するイメージであることが発達の徐々にこのイメージを作り上げていくのではないかと考えられる。

1. はじめに

都市の構造を探る研究としては類型論的アプローチが日本では1950年代から都市社会学の領域で行われている(例えば, 倉沢, 1968)。類型論

的研究は, その都市(または地域)の社会的な情勢(都市度, 就業者, 産業別構成, 人口, 人口増加率, 犯罪発生件数など)を要因としてタイプ分けを行っている。この種の研究は都市の社会構造の究明や社会移動(都市の過疎化や過密化)と構

*東京都立大学都市研究センター・人文学部

造との関係を作り出すのは人間であり、都市の構成要素には重要な部分として人間が含まれている。この点で人間の目を通した都市イメージを探ることには大きな意義があろう。都市イメージの分析は都市問題（薬物依存、アルコール依存、スラムなど）の研究にも示唆を与えられるであろうし、イメージの形成過程などの研究にも有益な結果を示すであろう。

都市イメージの研究として日本では東北地方の都市についてのイメージ分析（菅野他，1981）や加藤（1984），加藤他（1985），加藤他（1986），林他（1986）の一連の研究（都市イメージの分析Ⅰ～Ⅲ）では「大都市」についてのイメージ分析を行っている。また「大都市」という概念があいまいであるということから、都市イメージの分析Ⅳとして詫摩他（1987），加藤他（1987），古澤他（1987）によって「東京」についてのイメージ分析が行われた。

都市イメージの分析Ⅳでは被調査者の対象地点を白河と石垣としたが、今回はさらに稚内と地元の東京を対象地点に加え、東京対地方（白河、石垣、稚内）という構図からイメージ分析を行うこととする。またイメージに影響すると考えられる要因（発達、性別、知識度他）を含め検討することとする。

2. 方法

目的 東京についての56のイメージ項目を東京と

他の3地域（白河、石垣、稚内）の被調査者に実施し、イメージ構造を特定する。そしてイメージの得点をもとに東京と他の3地域（以下、地方と呼ぶ）を比較検討する。また性差、発達差、東京への居住経験の有無、東京への知識度の有無、東京の情報を獲得したいかどうかによるイメージ得点の比較を行う。

被調査者 東京、白河、石垣、稚内の4地域の小学5年生、中学2年生、高校2年生の男女と各児童・生徒の両親を調査対象とした（表1）。

質問紙 質問紙は、東京へのイメージ項目群、東京の知識に関する項目群、東京の情報獲得に関する項目、東京への居住経験に関する項目に性別、年齢等の基本的属性を加えてある。

1. 東京へのイメージ項目 東京のイメージと考えられる言葉はすべて採用することとし、56の項目を集めた。反応の仕方は“はい”，“いいえ”，“わからない”の多肢選択式の3件法とした。
2. 東京の知識に関する項目群、東京の情報獲得に関する項目、東京への居住に関する項目 知識については“東京の地理をよく知っていますか”のような主観的な知識度に関する3項目で構成され“とてもよく知っている”から“ぜんぜん知らない”までの4件法である（表3）。情報獲得については“東京についてもっと知りたいですか”という質問で“もっと知りたい”から“ぜんぜん知りたいと思わない”までの4件法の反応形式になっている（表7）。居住に

表1 各地区被調査者数（男/女）

	小学生	中学生	高校生	大人	計
東京	64/53	58/53	46/49	280/321	448/476
稚内	65/59	69/73	44/46	297/339	475/517
白河	68/65	82/66	59/71	395/398	604/600
石垣	27/19	46/50	37/48	199/218	309/335
	224/196	255/242	186/214	1171/1276	1836/1928

最下段は各発達段階の計

学年はそれぞれ小学生が5年生、中学生が2年生、高校生が2年生である

大人の平均年齢は東京で男子44.9歳、女子41.9歳以下それぞれ稚内43.2歳、40.2歳、白河43.7歳、40.9歳、石垣44.6歳、41.3歳である。

関しては，“住んだことがある”，“行ったことがある”，“行ったことがない”の3選択肢のうち1つを選択させている。

3. 結果

東京のイメージの因子構造の特定 4 地域の3228人の東京イメージ56項目の反応について主因子解をし、固有値1.1以上の9因子でバリマックス回転を行った。なお56項目の反応については“いいえ”と“わからない”を1つの反応として組み解析することとした。

表2にはそれぞれの軸に負荷の高かった(.35以上)項目を示してある。9因子まで抽出したが、第7因子から第9因子までは解釈が困難なため、第6因子までが示されている。

第1因子には、孤独な人が多い、冷たい、性が乱れている、人間関係がわずらわしい、などの項目に負荷が高く、殺伐とした人間関係を現すと考えられるため“東京砂漠”と命名した。第2因子は、よい働き口が多い、親しみやすい、楽しい、きれいな女性が多い、自分の好きな事ができる、などに負荷が高く、羽をのばして楽しめるというイメージから“Enjoy 東京”とした。第3因子は、はなやか、国際的、流行の最先端、しゃれた、な

どの国際性や先進性イメージより“先進都市”とした。第4因子は、空気汚い、犯罪多い、ごみごみしている、公害多い、などから“きたない”とした。第5因子は“便利”，第6因子は“ビジネス都市”とそれぞれの因子に負荷の高い項目群から命名した。

各イメージ因子合成得点毎の比較 各イメージ因子の合成得点は、東京と地方の比較、発達毎の比較、性差、情報獲得得点毎の比較、知識度得点毎の比較、東京への住居・訪問経験の有無による比較をすることで検討された。知識度については3項目を加算して得られるが、加算してよいものかどうかを検討するため、3項目間で相関係数が求められた。 .65～.77 (表3) の高い有意な相関が見られることから知識度得点はこれら3項目を加算してよいであろう。また各因子の得点は表2の各因子に負荷の高い項目の合成得点であり、“わからない”の影響を除くため“はい”から“いい

表3 知識度項目間の関連 (r)

	1	2	3
1, 東京の地理		.77	.65
2, 町の様子	.77		.66
3, 文化施設の場所	.65	.66	

表2 都市イメージ56項目のバリマックス解の結果 (.40以上の負荷を持つ項目)

因子	項目	相対寄与率(%)
第1因子 東京砂漠	3, 孤独な人が多い 7, 冷たい 12, 性が乱れている 25, 人間関係が乱れている 34, うすっぺらな 37, 暗い 45, 人が冷たい 51, 無愛想な人が多い 55, 危険	33.8
第2因子 Enjoy 東京	27, よい働き口が多い 29, 親しみやすい 30, 楽しい 41, きれいな女性が多い 43, 気楽な 44, 食べ物がおいしい 47, 自分の好きな事ができる 36, <u>自分の可能性が試せる</u>	30.8
第3因子 先進都市	3, はなやか 4, 国際的 6, 流行の最先端 8, しゃれた 9, 近代的 54, <u>文化の程度が高い</u>	9.1
第4因子 きたない	22, 空気が汚い 23, 犯罪が多い 28, ごみごみしている 33, 公害が多い 55, 危険	7.1
第5因子 便利	1, 便利 13, 交通便利 56, 買い物が便利	5.5
第6因子 ビジネス都市	38, <u>サラリーマンが多い</u> 42, <u>電車が混んでいる</u> 49, <u>いそがしい</u> 52, <u>いろいろな物がそろっている</u>	4.4

の項目は因子負荷量が.35以上.40未満を示す

え”を減じた値となっている。表4から表9までの各イメージの平均得点は0を基準とし、正はイエよりハイが多いことを示し、負はその逆を示す。

以下、東京砂漠からビジネス都市までの表4から表9までの結果である。それぞれ1要因の分散分析をし、カテゴリー数が2である表4と表9を除いて Student-Newman-Keuls 法による多範囲検定を行った。独立変数がそれぞれ地区別、発達、東京への居住・訪問経験、情報獲得、知識度、性別であり、従属変数がイメージ各因子の合成得点である。なお、多範囲検定はF値が有意である場合に行った。

東京砂漠イメージ 東京サンプルと比べ地方サン

プルのほうが有意に得点が高い(表4)。東京サンプルでは小学生より大人が有意に高く、地方サンプルでは段階的に小学生、中学生、高校生、大人と得点有意に上がって行く傾向にある(表5)。また東京での居住・訪問経験(以下経験と略す)では、“行ったことがある”が“住んだことがある”や“行ったことがない”より得点有意に高い(表6)。情報獲得については東京も地方も段階的に、“もっと知りたい”から“全然知りたくない”へと得点有意に高くなっている(表7)。知識度では東京サンプルも地方サンプルも低知識群が有意に高い得点を示している(表8)。

Enjoy 東京イメージ 地方サンプルより東京サン

表4 東京と地方のイメージ各因子の合成得点の比較(平均/S. D./サンプル数)

	1 東京砂漠	2 Enjoy 東京	3 先進都市	4 きたない	5 便利	6 ビジネス都市
地区別全体	2.82/4.13/3637	.48/3.80/3668	4.12/2.36/3652	4.03/1.65/3730	2.05/ -/3730	3.42/1.09/3726
1 東京	1.23/4.51/909	1.88/3.99/912	3.86/4.20/914	3.62/1.93/921	2.74/ .81/923	3.46/1.02/918
2 地方	3.34/3.85/2738	.01/3.61/2756	4.20/2.27/2738	4.16/1.53/2814	1.83/1.60/2807	3.41/1.11/2808
F	188.40***	173.75***	14.23***	74.80***	275.03***	1.56

各因子の合成得点は、ハイとイエの個数の差を基準とし算出してある

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

多範囲検定は Student-Newman-Keuls 法による(レンジ値は.05)

表5 東京と地方の小学生から大人までのイメージ因子の合成得点の比較(平均/S. D./サンプル数)

	1 東京砂漠	2 Enjoy 東京	3 先進都市	4 きたない	5 便利	6 ビジネス都市
発 1 小学生	.30/3.41/115	1.56/3.40/114	3.87/2.00/118	3.69/1.74/117	2.38/1.12/118	2.88/1.31/117
達 2 中学生	.85/4.00/110	1.31/4.07/111	3.45/2.49/110	3.53/1.81/110	2.22/1.37/111	3.23/1.07/111
東 3 高校生	.55/5.04/94	1.83/4.40/94	3.72/2.45/95	3.41/2.06/95	2.82/ .56/95	3.54/ .88/95
京 4 大人	1.59/4.67/590	2.13/4.00/593	3.96/2.71/591	3.66/1.96/599	2.89/ .51/599	3.61/ .92/595
F	3.83**	2.29	1.28	.60	33.56***	19.85***
多範囲検定	[1<4]				[2,1<3,4]	[1<2<3,4]
発 1 小学生	.98/3.54/284	.70/3.35/283	3.67/2.35/280	3.48/1.92/298	1.31/1.63/298	3.11/1.29/297
達 2 中学生	2.53/3.93/374	-.46/3.56/379	4.26/2.20/383	4.02/1.63/381	1.28/1.71/384	3.29/1.24/382
地 3 高校生	3.15/3.62/298	.47/3.33/302	4.36/1.98/299	4.29/1.23/303	1.70/1.60/301	3.50/ .96/303
元 4 大人	3.93/3.74/1772	-.07/3.69/1792	4.25/2.31/1776	4.28/1.45/1832	2.04/1.52/1824	3.47/1.06/1826
F	58.38***	7.53***	5.89***	26.35***	38.08***	11.34***
多範囲検定	[1<2<3<4]	[1,2<3,1]	[1<4,2,3]	[1<2,4,3]	[2,1<3<4]	[1,2<4,3]

各因子の合成得点は、ハイとイエの個数の差を基準とし算出してある

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

多範囲検定は Student-Newman-Keuls 法による(レンジ値は.05)

表6 東京への居住・訪問有無についてのイメージ各因子の合成得点の比較(平均/S.D./サンプル数)

	1 東京砂漠	2 Enjoy 東京	3 先進都市	4 きたない	5 便利	6 ビジネス都市
1 住んだことある	3.04/4.61/494	.93/4.02/499	4.18/2.40/504	4.23/1.51/512	2.39/1.31/511	3.55/1.07/514
2 行ったことある	3.54/3.70/1465	-.14/3.59/1473	4.28/2.27/1458	4.23/1.47/1500	1.95/1.55/1496	3.48/1.01/1497
3 行ったことない	3.16/3.53/757	-.29/3.27/774	4.06/2.20/764	3.99/1.62/789	1.23/1.67/789	3.18/1.27/786
F	4.31*	20.34***	2.41	6.60**	97.37***	24.64***
多範囲検定	[1,3<2]	[2,3,<1]		[3<1,2]	[3<2<1]	[3<1,2]

各因子の合成得点は、ハイとイエの個数の差を基準とし算出してある

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

多範囲検定は Student-Newman-Keuls 法による(レンジ値は.05)

表7 東京についての情報獲得の東京と地方のイメージ各因子の合成得点の比較(平均/S.D./サンプル数)

	1 東京砂漠	2 Enjoy 東京	3 先進都市	4 きたない	5 便利	6 ビジネス都市
情報獲得(東京)						
1 全然知りたくない	3.86/3.46/43	.26/4.47/42	2.67/2.88/43	4.23/1.31/43	2.60/1.11/42	3.40/1.22/43
2 今ぐらいでいい	2.13/4.50/209	1.32/4.42/210	3.81/2.72/211	3.75/1.91/214	2.76/.79/214	3.54/1.96/212
3 もう少し知りたい	.97/4.50/340	2.06/3.86/341	3.82/2.54/342	3.49/1.96/345	2.72/.83/345	3.49/.97/341
4 もっと知りたい	.55/4.45/317	2.28/3.68/319	4.11/2.44/318	3.61/1.96/319	2.75/.76/322	3.39/1.09/322
F	10.76***	5.00***	4.13***	2.33	.57	1.00
多範囲検定	[4,3<2<1]	[1,2<3,4]	[1<2,3,4]			
情報獲得(地方)						
1 全然知りたくない	4.52/3.27/454	-1.07/3.55/445	3.71/2.54/452	4.23/1.49/461	1.46/1.77/463	3.23/1.22/460
2 今ぐらいでいい	3.78/3.86/641	-.33/3.70/651	4.21/2.30/643	4.32/1.33/659	2.04/1.52/656	3.45/1.07/656
3 もう少し知りたい	3.21/3.78/939	-.08/3.43/958	4.26/2.24/950	4.18/1.47/980	1.84/1.58/970	3.49/1.03/973
4 もっと知りたい	2.23/3.99/631	1.20/3.46/637	4.48/1.99/629	3.89/1.78/646	1.85/1.53/651	3.38/1.16/653
F	36.17***	40.31***	10.78***	9.43***	12.03***	5.95***
多範囲検定	[4<3<2<1]	[1<2,3<4]	[1<2,3,4]	[4<3,1,2]	[1<3,4<2]	[1<4,2,3]

各因子の合成得点は、ハイとイエの個数の差を基準とし算出してある

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

多範囲検定は Student-Newman-Keuls 法による(レンジ値は.05)

プルで有意に得点が高い(表4)。発達的には東京サンプルでは差が見られず、地方サンプルでは小学生と高校生が中学生や大人より得点が高い(表6)。情報獲得では東京サンプルでも地方サンプルでも知りたい程度が高い程得点も高くなっている(表7)。知識度ではその程度が高い程東京サンプルも地方サンプルもイメージ得点が高い(表8)。

先進都市イメージ 地方サンプルの方が有意に得点は高く(表4)、発達的には東京サンプルには差はなく、地方サンプルで小学生が他より有意に

得点が高い(表5)。経験では差は見られないが(表6)、情報獲得では東京サンプルでも地方サンプルでも“全然知りたくない”が他より有意に得点は低い(表7)。知識度では地方サンプルでは差が見られないが、東京サンプルでは知識度高群が中群より得点が高い(表8)。

きたないイメージ 地方サンプルの方がこのイメージ得点は有意に高い(表4)。発達的には東京サンプルでは差がなく、地方サンプルでは小学生が他より有意に得点が高い(表5)。“行ったことがない”は“住んだことがある”や“行ったこ

表8 東京についての知識度の東京と地方のイメージ各因子の合成得点の比較(平均/S.D./サンプル数)

	1 東京砂漠	2 Enjoy 東京	3 先進都市	4 きたない	5 便利	6 ビジネス都市
知識度(東京)						
1 低群(6点以下)	1.86/4.42/281	1.09/4.04/282	3.62/2.49/280	3.84/1.87/285	2.64/.95/286	3.32/1.11/285
2 中群(7, 8点)	.65/4.60/340	2.09/3.81/340	3.38/3.03/346	3.42/1.87/347	2.73/.84/346	3.27/1.20/345
3 高群(9点以上)	.72/4.63/329	2.47/3.96/330	4.03/2.64/330	3.52/1.92/331	2.77/.75/333	3.63/.87/330
F	6.62**	9.79***	4.89**	3.83*	2.05	11.39***
各範囲検定	[2,3<1]	[1<2,3]	[2<3]	[2,3<1]		[2,1<3]
知識度(地方)						
1 低群(4点以下)	3.59/3.38/992	-.51/3.34/1009	4.16/2.21/1000	4.12/1.54/1030	1.42/1.70/1029	3.28/1.23/1025
2 中群(5~7点)	3.29/3.87/1184	.04/3.52/1188	4.22/2.24/1184	4.21/1.46/1215	1.99/1.51/1210	3.50/.98/1211
3 高群(8点以上)	3.02/4.52/552	.91/4.08/559	4.23/2.45/554	4.13/1.64/569	2.21/1.46/568	3.47/1.12/572
F	4.12*	28.07***	.27	.97	57.34***	12.42***
多範囲検定	[3<1]	[1<2<3]			[1<2<3]	[1<3,2]

各因子の合成得点は、ハイとイエの個数の差を基準とし算出してある

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

多範囲検定は Student-Newman-Keuls 法による(レンジ値は.05)

表9 東京と地方の性別毎のイメージ各因子の合成得点の比較(平均/S.D./サンプル数)

	1 東京砂漠	2 Enjoy 東京	3 先進都市	4 きたない	5 便利	6 ビジネス都市
性別(東京)						
1 男	1.35/4.47/439	1.64/4.11/441	3.72/2.74/443	3.48/2.06/444	2.70/.88/447	3.48/1.06/446
2 女	1.12/4.56/470	2.11/3.87/470	4.00/2.42/470	3.76/1.79/476	2.77/.73/475	3.45/.99/471
F	.60	3.15	2.65	5.13*	1.44	.93
性別(地方)						
1 男	3.39/3.93/1330	.003/3.62/1345	4.10/2.39/1334	3.42/1.13/1369	1.81/1.61/1369	3.42/1.13/1369
2 女	3.31/3.76/1385	.008/3.61/1399	4.29/2.16/1391	3.41/1.09/1424	1.84/1.59/1423	3.41/1.09/1424
F	.31	.001	5.02*	.09	.28	.09

各因子の合成得点は、ハイとイエの個数の差を基準とし算出してある

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

多範囲検定は Student-Newman-Keuls 法による(レンジ値は.05)

とがある”といった経験あり群より有意に低い得点である(表6)。情報獲得では東京サンプルでは差はないが、地方サンプルは“もっと知りたい”が他より有意に低い得点となっている(表7)。知識度では地方サンプルに差はないが、東京サンプルは低群が他より有意に高い(表8)。便利イメージ 東京サンプルの方が有意に得点が高い(表4)。発達的には東京サンプルも地方サンプルも高校生や大人が小学生や中学生よりも有意に得点が高く、特に地方サンプルでは高校生よ

り大人の方が得点が高かった(表5)。“行ったことがない”, “行ったことがある”, “住んだことがある”と経験の程度が増すに従い得点が高くなっている(表6)。情報獲得では東京サンプルでは差がないが地方サンプルでは“全然知りたくない”が得点が低く, “今ぐらいでいい”が高い得点となっている(表7)。知識度では地方サンプルが低群より中群, 中群より高群の方が得点が高い。

ビジネス都市イメージ 東京サンプルと地方サン

プルとの地域差は見られていない(表4)。発達的には東京も地方も高校生や大人が小学生や中学生より有意に得点が高い(表5)。経験では“住んだことがある”, “行ったことがある”が“行ったことがない”よりも得点が高い(表6)。情報獲得については東京サンプルでは差は見られないが, 地方では“全然知りたくない”が他より有意に低い結果であった(表7)。知識度では東京サンプルは高群が低群や中群より得点が高く, 地方サンプルは中群や高群が低群よりも得点が高い結果だった(表8)。なお性差があったのは東京の男子が便利イメージで女子より得点が高く, 地方の女子が先進都市イメージで男子より有意に高いという2点のみであった(表9)。

4. 考 察

各変数における有意差を見てきたが, 更に各イ

メージ合成得点に対して各変数の影響を検討し, 表4から表9までの結果と合わせて検討するため各イメージ合成得点を従属変数とした重回帰分析を行った。表10では独立変数を地区別, 発達, 情報獲得, 知識度, 性別として東京と地方の全サンプルを対象とした。また表11では東京を対象とし, 発達, 情報獲得, 性別を独立変数とした重回帰分析をし, 表12では地方を対象とし, 発達, 経験, 情報獲得, 知識度, 性別を独立変数とした重回帰分析を行った。

東京砂漠イメージについては全サンプルを対象とした重回帰分析の結果では独立変数のなかで発達の影響が一番大きい(表10)。しかし東京をサンプルとした場合(表11)よりも地方をサンプル(表12)とした場合の方が標準偏回帰係数が大きく, 地方の結果が全サンプルの結果に影響を与えていると考えられる。表5と合わせて考えると, 特に地方では発達に伴い殺伐とした人間関係のイ

表10 各イメージ合成得点と従属変数とした重回帰分析(東京と地方)

	東京砂漠 標準偏回帰 係数(F値)	Enjoy 東京 標準偏回帰 係数(F値)	先進都市 標準偏回帰 係数(F値)	きたない 標準偏回帰 係数(F値)	便利 標準偏回帰 係数(F値)	ビジネス都市 標準偏回帰 係数(F値)
地区別	.15(71.49**)	-.13(48.45**)	.10(25.91**)	.21(40.74**)	-.18(105.12**)	.03(3.09)
発達	.18(106.99**)	.03(2.56)	.08(17.83**)	.07(18.27**)	.20(139.64**)	.12(46.98**)
情報	-.13(59.46**)	.17(97.83**)	.12(42.17**)	-.06(9.68**)	.08(20.93**)	.05(8.68**)
知識度	-.12(41.48**)	.15(63.18**)	.01(.52)	-.04(3.78**)	.16(78.08**)	.07(14.73**)
性別	-.04(7.04**)	.05(10.65**)	.77(7.77**)	.02(1.97)	.05(8.39**)	.01(.12)

重相関係数(R)は東京砂漠からそれぞれ.35, .31, .15, .19, .37, .15である/*** $p < .001$ ** $p < .01$
自由度は地区別, 性別が(1,3320), 発達, 情報が(3,3328), 知識度が(11,3320)である

表11 各イメージ合成得点を従属変数とした重回帰分析(東京)

	東京砂漠 標準偏回帰 係数(F値)	Enjoy 東京 標準偏回帰 係数(F値)	先進都市 標準偏回帰 係数(F値)	きたない 標準偏回帰 係数(F値)	便利 標準偏回帰 係数(F値)	ビジネス都市 標準偏回帰 係数(F値)
発達	.11(10.40**)	.06(3.47*)	.04(1.31)	.00(.00)	.29(79.26**)	.23(46.84)
情報	-.11(19.43**)	.12(12.01**)	.10(8.33**)	-.07(4.18**)	.07(3.93**)	-.01(.09)
知識度	-.17(24.98**)	.15(19.17**)	.08(5.39**)	-.06(2.87**)	.04(1.05)	.11(9.54**)
性別	-.07(3.74)	.09(6.71**)	.07(4.05*)	.07(3.60)	.03(.60)	.01(.05)

重相関係数(R)は東京砂漠からそれぞれ.25, .21, .15, .12, .30, .27である/*** $p < .01$ ** $p < .05$
自由度は性別が(1,876), 発達, 情報が(3,874), 知識度が(11,866)である

表12 各イメージ合成得点を従属変数とした重回帰分析(地方)

	東京砂漠 標準偏回帰 係数(F値)	Enjoy 東京 標準偏回帰 係数(F値)	先進都市 標準偏回帰 係数(F値)	きたない 標準偏回帰 係数(F値)	便利 標準偏回帰 係数(F値)	ビジネス都市 標準偏回帰 係数(F値)
発 達	.23(115.17**)	.00(.01)	.09(17.23**)	.11(23.34**)	.16(56.94**)	.06(6.98**)
経 験	.04(3.48*)	-.05(5.08**)	.00(.01)	-.04(2.65)	-.16(46.18**)	-.11(19.72**)
情 報	-.13(37.91**)	.19(85.65**)	.13(35.13**)	-.05(5.41**)	.08(17.13**)	.07(10.29**)
知 識 度	-.07(10.47**)	.11(23.98**)	.03(.28)	-.04(2.95**)	.10(18.68**)	.00(.03)
性 別	-.04(5.07*)	.05(6.29*)	.05(5.08*)	.01(.12)	.04(4.88*)	.00(.03)

重相関係数(R)は東京砂漠からそれぞれ.29,.25,.14,.14,.31,.15である/ ** p<.01 * p<.05
自由度は性別が(1,2442), 発達, 情報が(3,2439), 知識度が(11,2432), 経験が(2,2440)である

イメージが大きく膨らんで行くようである。地区別は現在東京に住んでいるか、地方に住んでいるかというカテゴリーの分類になるが、地区別については標準偏回帰係数の大きさは発達に次ぎF値も有意になっている(表10)。表6の結果と同様地方での得点が高いことを示している。経験は過去の居住の有無を聞く項目が含まれ、地区別との比較対照ができるであろう。表10の結果では経験はF値が有意ではあるが、標準偏回帰係数は低い。これは表6の“行ったことがある”が“住んだことがある”や“行ったことがない”より得点が高く、得点分布が逆U字型を示すことに起因するであろう。よって経験については表6の結果をもとに考察した方がよいであろう。居住も訪問も経験のない群より訪問経験群の得点が有意に高いため、東京への訪問が地方の東京砂漠イメージを引き上げてるように考えられる。また居住経験群も訪問経験群より得点が低いため、東京に住んだことがない者が訪問することによって東京砂漠のようなネガティブなイメージが出来上がるようである。ここで現東京居住群(表4の東京)と居住経験群との間で東京砂漠イメージ合成得点についてT検定を行うと、居住経験群の方が有意に得点が高いことが分かった(t=7.08, p<.001)。これは過去に東京に住んでいた頃の得点と現在地方に住んでいる得点を比較したような縦断研究による結果ではないが、地方に移るとこのイメージ得点が高くなることが示唆される。

同様に東京砂漠イメージ合成得点を従属変数と

した情報獲得と知識度についての標準偏回帰係数は東京サンプル(表11)も地方サンプル(表12)も負の値を示している。表7や表8より明らかであるが情報獲得では東京サンプルも地方サンプルも“知りたい”より“知りたくない”群の方が東京砂漠イメージが高く、知識度では東京、地方の両サンプル共低得点群でこのイメージ得点が高い。情報獲得は東京についての情報収集の動因を示す。それゆえ東京砂漠のようなネガティブなイメージでは“知りたい”群の方が得点が高いのであろう。情報への動因がネガティブなイメージを低減したと考えてよいのではないだろうか。また地方サンプルではネガティブなイメージであるきたないイメージについても“もっと知りたい”群が他の3群より得点が低く(表7)、標準偏回帰係数も低い値ではあるが東京サンプルも地方サンプルも負の値を示し(表11, 表12)、東京砂漠イメージと同様の考察ができよう。逆にポジティブなイメージと考えられるEnjoy 東京イメージや先進都市イメージでは東京、地方両サンプル共標準偏回帰係数は正の値を示し(表11, 表12)、表7では“知りたい”群の方が両サンプル共これらポジティブなイメージ得点で高い値となっている。ネガティブなイメージでは情報獲得の動因がその得点を下げ、ポジティブなイメージでは得点を上げると考えてよさそうである。

更にここで情報獲得と知識度について考察を試みる。表12の標準偏回帰係数の絶対値に注目すると、便利イメージ以外の5イメージで知識度よ

り情報獲得の方が絶対値が大きい。地方サンプルでは知識度より情報獲得の方が各イメージをより多く説明できることが示唆される。“知っている”という状態より“知りたい”という動因がイメージを操作すると考えられよう。しかし表11の東京サンプルでは東京砂漠、Enjoy 東京、ビジネス都市の各イメージで標準偏回帰係数の絶対値は情報獲得よりも知識度の方が高い。東京サンプルの場合情報をすでに獲得していること、つまり知識度が地方サンプルよりも高い（表13）ことが各イメージに対する情報獲得の影響を低めているのかもしれない。Enjoy 東京イメージでは表4の結果から東京サンプルの方が得点は高かったが、東京・地方両サンプルを対象とした重回帰分析（表10）では地区別より情報獲得や知識度の方が標準偏回帰係数の絶対値が高い。東京が楽しめ、自分のやりたいことができるというイメージは地方に住むか東京に住むかということによって影響されるが、それと同等かそれ以上に情報獲得や知識度に影響を受けることが理解できる。

表13

知識度及び情報獲得の平均得点 (S D)		
	知 識 度	情 報 獲 得
地 方	5.50(2.03)	2.66(1.01)
東 京	7.61(1.87)	3.03(.88)

*** p < .001

先進都市イメージでは表4の結果から東京サンプルより地方サンプルの方が得点が高いのが分かる。Enjoy 東京イメージや便利イメージのようなポジティブなイメージでは東京サンプルが高く、東京砂漠イメージ、きたないイメージのようなネガティブなイメージでは地方サンプルの方が高い得点を示していた（表4）。ポジティブなイメージであると考えられる先進都市イメージではこの傾向とは反対の結果であり、ポジティブなイメージであるからといって東京サンプルの方が高い得点を示すとは限らない。今後検討が必要な部分となろう。発達では地方サンプルで小学生が中学生、

高校生、大人よりイメージ得点は低いが、東京サンプルでは発達の差はない（表5）。また表9による性差も有意なものではなく、表11、表12の重回帰分析によるF値は有意であるがその標準偏回帰係数は低く、全般的に東京を近代的なイメージでとらえているのが理解できる。表7および表11、表12より東京サンプル、地方サンプル共に情報獲得ではその得点の高くなるにつれ先進都市イメージの得点も高くなりポジティブなイメージと動因との関係がここでも示唆されよう。

きたないイメージでは表4から東京サンプルよりも地方サンプルで得点が高いことが分かる。東京・地方両サンプルの重回帰分析結果では説明変数のうち地区別が一番大きな標準偏回帰係数であり有意なF値を示している（表10）。ところで、経験について表6を見ると、“行ったことがない”という経験なしよりも“住んだことがある”や“行ったことがある”という経験ありの方でこのイメージ得点は高い。地方サンプルでの高い得点は経験ありのサンプルによって引き上げられていると言えよう。経験ありの中で“住んだことがある”が“行ったことがある”と同様に高い得点を示したことは興味深い。“住んだことがある”人々は過去においては東京人であり、現東京人（表4の東京サンプル）と比較しても有意に得点は高い（ $t = 9.14, p < .001$ ）。縦断的な結果ではないが、東京から地方への移動が、空気の汚れ、犯罪、混雑、公害のような物理的な状況についてのイメージを高めることが示唆される。推測の域を出ないが、引越し先の物理的な環境と過去に住んでいた東京との比較によって“住んでいたことがある”人々はこのイメージ得点を高くしたのかもしれない。また東京サンプルは、ネガティブなイメージについては抑制的に反応したとも考えられる。いずれにしても今後検討の余地があろう。またきたないイメージについて発達のには地方サンプルで小学生が他の発達段階よりも有意に得点が低かったが、東京サンプルでは各発達段階で有意な差が見られなかった。東京では小学生から大人まで連続的に認識としてはほぼ変わらないイメージだと考えられるかもしれない。情報獲得、

知識度については表7、表8の結果から地方サンプルでは情報獲得、東京サンプルでは知識度で有意差のある結果を示した。東京、地方それぞれをサンプルとした重回帰分析の結果はF値は有意となっているが、標準偏回帰係数はどれも絶対値が低い(表11、表12)。きたないイメージへの効果は情報獲得、知識度共低いものと考えたほうがよいであろう。

便利イメージについては表4から地方サンプルよりも東京サンプルの方が得点は高い。東京と地方の両サンプルを対象とした重回帰分析の結果では(表10)地区別は発達について標準偏回帰係数の絶対値が大きかった。表11や表12のように東京と地方を別けて分析した場合でも便利イメージに対する発達の効果が一番大きい。特に東京サンプルでの結果は、標準偏回帰係数の値が他の変数より大きく発達の効果が大きいことを示している。地方サンプルでは発達の標準偏回帰係数は経験の標準偏回帰係数の絶対値と同値となっているが他の変数よりは高い値である。東京サンプル、地方サンプル共に年齢的な増加が便利イメージを引き上げていることは確かであり、このことは表5の結果からも確認できる。また地方サンプルでは表12の結果を見ると経験要因の影響も小さくないようだ。実際に表6では“行ったことがない”よりも“行ったことがある”の方がイメージ得点は高く、さらに“住んだことがある”の方が得点は高い。東京に行くことで東京の便利さを認識し、東京での生活を現実に経験しその便利さを実感する、と考えるのが自然ではなかろうか。また表8から知識度が高くなる程、便利イメージは高くなる傾向を示しているが、表12の地方サンプルにおける結果でもこのことは示されている。

最後にビジネス都市イメージについてであるが、東京サンプルと地方サンプルに有意差が見られないのはこのイメージだけであった(表4)。ネガティブでもポジティブでもなく、中性的なイメージであるということが有意差を示さなかったのであろうか。今後検討を要する。発達的には東京サンプル、地方サンプル共に年齢が低い群でこの得点は低く、年齢が高い群で得点は高くなっている

(表5)。表11、表12の重回帰分析の結果でもこの傾向を示していると言えよう。年齢の増加に伴ってイメージ得点が増加する傾向は表5より地方サンプルではEnjoy東京以外の各サンプルで見られ、東京サンプルでは東京砂漠、便利、ビジネス都市の各イメージで見られる。地方サンプルで5イメージに対して東京サンプルで3イメージがこの傾向を示し、地方サンプルでこの傾向が強い事が分かる。東京サンプルでは東京にいることによる直接的な接近が若年の頃より安定的なイメージをいくつかのイメージで作出し、他に要因が無い限り永続的にそのイメージを保つものと考えられよう。また地方サンプルでは東京への間接的な接近によって多くの(6イメージ中5)イメージが発達の段階を追って作られて行くのであろう。情報獲得では地方サンプルの“全然知りたくない”が他のカテゴリーよりも低いイメージ得点を示している(表7)。ポジティブなイメージであるEnjoy東京、先進都市、便利の各イメージと類似なパターンを示し、ネガティブなイメージの東京砂漠やきたない両イメージとは反対のパターンを示している。このパターンについては表12の標準偏回帰係数の正負のパターンを見ても確認できる。経験については“住んだことがある”や“行ったことがある”が“行ったことがない”よりもビジネス都市イメージの得点は高く、住んだり行ったことによって東京がビジネス都市であることを確認し、イメージを作りやすくなったと考えることができよう。

5. 結論

東京イメージについては、6イメージを特定した。東京砂漠、Enjoy東京、先進都市、きたない、便利、ビジネス都市の各イメージである。加藤他(1985)では大都市についてのイメージ構造分析を行っている。項目数が22であり本研究の56項目と比べ少なく、「大都市」と「東京」というように必ずしも同一の対象を刺激にしているわけではないが、大都市イメージでは生活しやすさ、マイナスイメージ、不便さ、解放感の4軸を数量化Ⅲ

類によって抽出している。東京砂漠がマイナスイメージに対応し、Enjoy 東京が生活しやすさと解放感に対応し、便利が不便さに対応しているように考えられる。大都市そのものはあいまいな概念であるとしながらも東京イメージと重なる部分があることは興味深い。重ならない部分が必ずしも東京イメージの特殊性とは言えないが、さらに大阪のような都市のイメージとの比較によって特殊性も明らかになろう。

各イメージを東京と地方の比較、発達毎、情報獲得毎、知識度毎の比較、東京への居住、訪問経験の有無による比較を行い検討した。また各イメージへの影響度として各イメージを従属変数とした重回帰分析を行った。

地区別ではネガティブイメージで地方サンプルの得点が高く、ポジティブイメージで東京サンプル得点が高かった。ただしポジティブイメージと考えられる先進都市イメージで地方サンプルの得点が高く、上記のパターンに適合した結果ではなかった。しかし基本的にはネガティブイメージで地方サンプルが、ポジティブイメージで東京サンプルが高い得点をとると考えてようだろう。東京サンプルで「自分達の」住んでいる所へのポジティブイメージの過大視、ネガティブイメージの抑制が働いているのではないだろうか。東京サンプルと地方サンプルのイメージの差を作り出している要因のひとつに知識度の問題があらう。地方サンプルでは知識度が低い群でポジティブイメージが低く、ネガティブイメージが逆に高い結果であった。東京と地方の両サンプルを対象とした重回帰分析の結果では同様の効果を示していた。知識度が低いことがポジティブイメージを低減し、ネガティブイメージを増大していると考えられ、そこに偏見が作用していよう。東京サンプルと地方サンプルを知識度で比較した場合その平均得点は地方サンプルの方が低く、このことが東京サンプルと地方サンプルとの間の得点差に反映していることが示唆される。

経験も東京サンプルと地方サンプルとの得点差を作り出す要因となっているであろう。“行ったことがある”や“住んだことがある”のような経

験あり群は各イメージに対する得点が経験なし群より高い。ポジティブイメージでは逆に経験することが東京サンプルとの差を縮める要因となっている。しかしきたないイメージでは経験することによって得点が引き上げられ地方サンプルと東京サンプルの得点差を広げる役目を果たす1要因となったと考えられる。このパターンと異なっているのが東京砂漠イメージであった。“行ったことがある”群の方が“住んだことがある”群よりも得点が高かった。東京砂漠イメージが他のイメージとは異なり対人関係に関連していたことがこのような結果となったと考えられる。“行ったことがある”という程度では東京人とは表面的なコミュニケーションしかできないのがほとんどであろう。この表面的なコミュニケーションによって“冷たい”や“人間関係が乱れている”などの東京砂漠イメージの得点が高くなったと考えれば理解しやすいであろう。

東京サンプルと地方サンプルで説明変数の各イメージ得点への影響の与えかたの違いが見られた。地方サンプルでは情報獲得が各イメージへの影響が知識度より大きかったが、東京サンプルではこのようなことは見られなかった。また発達的には地方サンプルでは発達段階が進むにつれほとんど（6イメージのうち5）のイメージ得点は高くなる傾向にあるが、東京サンプルではこのような傾向にあるのは一部のイメージのみである。東京サンプルでは小学生段階でイメージが決まると以後安定するが、地方サンプルでは徐々にイメージが作られていくと考えられよう。

いくつかのイメージについて補足すると、東京砂漠イメージでは発達の影響が特に大きかった。対人関係に関するイメージであるだけに他人とのコミュニケーションやその観察によって発達の時間をかけて形成されていくのであろう。過去に東京に住んでいた人々が地方に移ることによりきたないイメージが高くなることが示唆され、東京と地方との比較過程が働いていることが考えられる。便利イメージでは発達の影響が大きかった。また地方サンプルでは経験の影響も大きく、東京の物理的環境とのかかわりを通して便利さを実感

していくのだと考えられよう。なお性差については有意な結果が少なく、その影響力も小さなものと考えられる。

以上6イメージ得点の東京サンプルと地方サンプルの違いについて諸要因の影響度や各要因がどのようにかかわっているかを検討してきた。本研究では東京イメージについて要因を限定したが、今後職種や学歴のような個人の社会的状況、どのような世帯であるかという家族状況、政治や経済に対する意見や態度、価値感などのような諸要因も含め検討して行く必要がある。またあるイメージが最初に作られ、次には他のイメージが作られるというような経時的な過程があるのかそれともいくつかのイメージが同時に形成されていくのかということも検討の余地がある。今後はさらに東京と同じ大都市である大阪イメージとの比較も検討していく予定である。

文 献 一 覧

古澤照幸・詫摩武俊・加藤義明・山本真理子・川村久美子・菅原健介

1987 「都市イメージの分析Ⅳ－その3・東京とその地域への心理的接近度の分析」日本教育心理学会29回大会 p 558

林洋一・加藤義明・詫摩武俊・山本真理子

1985 「都市イメージの分析Ⅲ－その2・研究の結果と考察」日本教育心理学会27回大会 p p 558-559

加藤義明

1984 「都市イメージの分析Ⅰ」『都立大学人文学報』

No.168 p p 75-107

1988 「環境認知と都市イメージ」(文部省科学研究費研究)

加藤義明・詫摩武俊・林洋一・山本真理子

1985 「都市イメージの分析Ⅲ－その1・研究の目的と方法」日本教育心理学会27回大会 p p 556-557

加藤義明・詫摩武俊・山本真理子・川村久美子・菅原健介・古澤照幸

1987 「都市イメージの分析Ⅳ－その2・東京イメージの構造と発達的变化」日本教育心理学会29回大会 p 556

加藤義明・山本真理子

1984 「都市イメージの分析Ⅱ－地方居住者が大都市にたいしていただくイメージの構造－」日本教育心理学会26回大会 p p 506-507

倉沢進

1968 「日本の都市社会」福村出版

菅野幸宏・加藤孝義・田中潜次郎

1981 「東北の都市のイメージ－その1・評定法と連想法による分析－」日本心理学会45回大会 p 726

詫摩武俊・加藤義明・山本真理子・川村久美子・菅原健介・古澤照幸

1987 「都市イメージの分析Ⅳ－その1・調査の目的と方法」日本教育心理学会29回大会 p 554

山本真理子・加藤義明

1984 「都市イメージの分析Ⅱ－大都市居住希望を決定する要因の決定」日本教育心理学会26回大会 p p 508-509

Key Words (キー・ワード)

Images of Tokyo (東京イメージ), Age differencies (年齢差), Factor analytical structure (因子構造), Knowledge (知識), Information (情報), Experience (経験)

COMPARATIVE STUDY OF THE TOKYO IMAGE
AMONG TOKYOITES AND COUNTRY PEOPLE

Teruyuki Furusawa*, Noriaki Kato*

*Center for Urban Studies, Tokyo Metropolitan University

Comprehensive Urban Studies, No.37, 1989, pp.121-132

We asked elementary school children, middle and high school students and adults (their parents) of four areas, Ishigaki, Shirakawa, Wakkanai, and Tokyo, about their image of Tokyo; the questionnaire included 56 image items, questions on level of knowledge of Tokyo, degree of desire for information on Tokyo, and personal characteristics like age and sex distinction. Factor analysis of the 56 image items produced an analytical factor structure of "Tokyo desert", "fun city Tokyo", "progressive city", "filthiness", "convenience", and "business city".

Looking at the results by area, the country samples scored higher on the negative images ("Tokyo desert", "filthiness"), while the Tokyo samples scored higher on the positive images ("fun city Tokyo", "convenience"). This was not so for the positive image "progressive city". Those with a low level of knowledge of Tokyo had a less positive image and more negative image of Tokyo. This effect of the level of knowledge might be a major factor in the results classified by area. Both, positive and negative images tended to score higher when country people had experience of either visiting or living in Tokyo.

The "filthiness" factor further widened the gap between the country sample and the Tokyo sample. The "Tokyo desert" factor was higher for those who had "visited Tokyo" than for those who had "lived in Tokyo". In the country sample, the degree of desire for information on Tokyo turned out to have more effect on each image than the level of knowledge about Tokyo, but the Tokyo sample showed no similar trends.

Regarding developmental stages, the country sample scores tended to rise with higher stages of development for most of the images (five out of six), but for the Tokyo sample this was the case only partially. That the effect of development was especially strong on the image of "Tokyo desert" probably means that this image pertaining to human relations is developing gradually with age.